

BAUDELAIRE の〈spleen〉の形象——空間篇

南 直 樹*

はじめに

Spleen はもともと英語であるが、フランスでは 18 世紀後半から文学者たちが用いるようになり、CHATEAUBRIAND 以来ロマン派詩人たちの愛用語となったとされる。『ロベールフランス語大辞典』の記述によれば、spleen は、語源的にはふさぎのもととなる「黒い体液」の出てくると信じられていた「脾臓」を、従って「はっきりした原因のない、あらゆるものに対する嫌悪感によって特徴付けられる、一時的な憂鬱」¹ を意味する。Claude PICHOS は « Les Fleurs du mal » (Pléiade 版) の Notes et variantes の中にこう書いている。「spleen という語の意味はこの表題に直接先立つ詩 *Au Lecteur* によって彩られている。ロマン派の *mélancolie* ではなく、BAUDELAIRE がこの語に委ねる神学的かつ実存的な意味での « ennui », 後悔と陰鬱を伴った罪である」²。BAUDELAIRE は、« Les Fleurs du mal » (初版) が出版され風俗壊乱の罪に問われた直後の 1857 年 12 月 30 日付けの母親 AUPICK 夫人宛の手紙の中で、彼が感じている spleen の感情を次のように具体的に表明している。

たしかに、私は私自身について嘆くべきところが沢山ありますし、この状

* 福岡大学人文学部教授

態にすっかり驚きもし^{おび}怯えてもいます。転地を必要としているかどうか、それについてはまったく分かりません。病める身体が精神と意志を減退させるのか、あるいは精神的な無気力が身体を疲れさせるのか、まったく分かりません。ただ私の感じているもの、それは涯^{はて}しもない落胆であり、耐え難い孤立の感覚、漠とした不幸への絶え間ない恐れ、自分の力に対する完全な不信、欲望の全面的な不在、何にもあれ楽しみを見出すことの不可能、といったものです。私の書物の奇妙な成功とそれが巻き起こした憎悪の数々は少しの間私の興味を引きましたが、その後また落ち込んでしまいました。ご覧の通り、親愛なる母上、これはフィクションを産み出し装うことをもって職業とする人間にとっては、かなり深刻な精神状態というものです。——私は絶えず自問します、これが何の役にたつのだ？それが何の役に立つのだ？と。これこそまさしく spleen の精神です。³

BAUDELAIRE が自ら編纂した唯一の詩集「Les Fleurs du mal」において、最初の最大の章を構成する「Spleen et Idéal」（憂鬱と理想）の表題が示すとおり、BAUDELAIRE 詩の基礎的テーマは spleen である。詩人にとって現実は無憂鬱であり、そこからの脱出の希求を歌うのが理想である。散文詩集「Spleen de Paris」の次のいくつかの節はこの BAUDELAIRE の遁走の欲望をよく表している。「どこにいても僕は居心地いいということはないし、いつも、僕の今いるのと別のところへ行けばもっと居心地がいいだろうとおもっている」⁴（*Les Vocations*）。「私は、今いるのではない場所に行けば、かならず具合がよくなるだろうという気がするものであり、この引越しの問題は、私が絶えず自分の魂を相手に議論する問題の一つである」⁵（*Anywhere out of the world*）。後者の散文詩の最後で BAUDELAIRE は「ついに、私の魂は爆発し、そして賢明にもこう叫ぶ、「いずこなりと！いずこなりと！この世の外でありさえすれば！」⁶と書いているが、しかしこの「この世の外のいずこなりと！」は正確

にはどこに位置するのであろうか？これは本当によい質問であらうか？なぜならこの世界は唯一無限のものであって外部はないのであるから、彼処や彼岸といったものは人間の想像力の産物であって実在しない。もしそうしたものを人間が必要としているとするのであれば、それは謂わば生きるための方便である。従ってこの世の外部のいたるところで現前しているのは死であり、その有限で相対的な存在性のゆえに、BAUDELAIRE（そしてわれわれ人間すべて）は、この世界に生きる限り、そしてその生が現実と対立するものとしてある限り、その生を spleen として感ずる。「この意味で、spleen は BAUDELAIRE に世界の否定的面だけを気づかせよることによって、BAUDELAIRE を彼自身から、そして世界の魔術的美しさから剥奪させる」⁷と Emmanuel ADATTE は指摘する。

実際、人はしばしば世界について、現実について有限の限られた認識しか所有できないがために、それらを分割され、断片化されたものとして知覚することしかできない。それに対して BAUDELAIRE は想像力の無限の力のお蔭で、もうひとつの別の生の可能性を表明することによって、彼の有限な存在を（従って、彼の限られた認識を）超越する可能性を持つことを知っている。BAUDELAIRE の詩がしばしば現実のわれわれの認識に対する反抗であり、根源的に世界の単一性をのなかに含まれた可能性への無限の接近を願望しているように見えるのはこの意味においてである。しかし実際には、この単一性は世界を再創造しようとする BAUDELAIRE の内的願望を証明す詩篇のなかにのみ反映されうる。他方で、BAUDELAIRE はこの「絶対の現実」とも言うべき理想が決して詩人によって到達されえないことを知っている。それはいわば「あるイカロスの嘆き」(*Les Plaintes d'un Icare*) と呼ぶべきものである。

Les amants des prostituées
Sont heureux, dispos et repus;
Quant à moi, mes bras sont rompus

4 Pour avoir étreint des nuées.

C'est grâce aux astres nonpareils
Qui tout au fond du ciel flamboient,
Que mes yeux consumés ne voient

8 Que des souvenirs de soleils.

En vain j'ai voulu de l'espace
Trouver la fin et le milieu;
Sous je ne sais quel œil de feu

12 Je sens mon aile qui se casse;

Et brûlé par l'amour du beau,
Je n'aurai pas l'honneur sublime
De donner mon nom à l'abîme

16 Qui me servira de tombeau.⁸

「淫売の情夫たちは幸せだ、元気澆刺、^{たらふく}鱈腹食って。この私といえば、雲を抱きしめたために、腕が折れてしまった。空の奥底で燃えている比類なき星たちのお蔭なのだ、焼け切ってしまった私の眼に太陽の思い出しか見えないのは。私は虚しく望んで果たさなかった、空間の涯と中心を見出そうと。何やら知れぬ火の眼差しを浴びて私は自分の翼が砕けるのを感じる。そして美への愛に身を焼かれたこの私は、墓となるような深い淵にわが名を冠するという崇高なる栄誉も手には入れはすまい」(v.1-16)。太陽に向かっての空中飛行という穢れのない^{イデア}観念から出発して、歓喜とともに空高く飛翔する存在となり、太陽に接近し過ぎて翼の蠟が溶け、そのために地上に落下する道をたどったイカロスの

運命、この認識が BAUDELAIRE 詩における spleen の主題の出現の根拠である⁹。

I

BAUDELAIRE にとって現実の空間がどのように認識されていたかは、「Les Épaves」に含まれている *Sur « Le Tasse en prison » d'Eugène Delacroix* という詩篇がよく示している。

Ce génie enfermé dans un taudis malsain,
 Ces grimaces, ces cris, ces spectres dont l'essaim
 11 Tourbillonne, ameuté derrière son oreille,

Ce rêveur que l'horreur de son logis réveille,
 Voilà bien ton emblème, Âme aux songes obscurs,
 14 Que le Réel étouffe entre ses quatre murs!¹⁰

「不健康な陋屋ろうおくに閉じ込められた天才」とは詩人自身のことに他ならず、その周りは「はやりなげ猛る猟犬さながら耳の後ろに群がり渦巻くこれらのしか鬨めっ面、これらの叫び声、これらの妖怪たち」が取り巻いている世界である。BAUDELAIRE は「己が棲処すみかのおぞましきにはっと目覚める夢想家」であり、「〈現実〉がその四つの壁のうちに窒息させる〈魂〉」である。「そうとも！この陋屋あぼらや、永久なる倦怠アンニユイのこの棲処すみかこそ、まさに私の棲処なのだ」¹¹（散文詩 *La Chambre double*）。こうして現実と BAUDELAIRE の間には、詩人が強制的に祓うことが難しい力と感じている spleen との闘いが存在していると推論することができる。このように現実の空間をきわめて不十分な、憂鬱なものと感じている BAUDELAIRE には、

地上はそこで人間が囚われ人となり、無駄に自分の力を消耗してゆく独房に似る。空間はあらゆる方面から閉じた牢獄として出現する。そこではあらゆる希望が追放されているように見える。

Le Mauvais Moine という詩篇では、一方で「昔の僧院の廻廊は、大きな壁面の上に、神聖な〈真理〉を絵にして繰り広げ」、「キリストの^ま蒔いた種が花と咲いていたこの時代、今では名を引かれることも少ない傑出した僧が一人ならず、埋葬の場をアトリエと心得て、単純明快なかたちで、〈死〉を輝かせていた」時代があった、つまり「死」が真理であったのに対して、現代の詩人の生きる空間は以下のようなものである。

—— Mon âme est un tombeau que, mauvais cénobite,
Depuis l'éternité je parcours et j'habite;
11 Rien n'embellit les murs de ce cloître odieux.

Ô moine fainéant! Quand saurai-je donc faire
Du spectacle vivant de ma triste misère
14 Le travail de mes mains et l'amour de mes yeux?¹²

「——私の魂は墓、そこに、無能な修道僧よろしく、永劫このかた、私は駆け回り、住みついている。この忌まわしい廻廊の壁を飾るものは何もない。お無為なる修道僧よ！いつの日か^よ能く私は、わが哀れなる悲惨の生きた^{スペクタクル}展観をもって、私の手の労作とも、私の眼の悦びともなし得るのだろうか？」(v.9-14)。詩人は自分の魂の空間を墓と認識し、自身の無能と怠惰への無力感に^{さいな}苛まれているのである。

同様の意味で、*Le Couvercle* では本来天上的な夢想を誘うはずの空も、BAUDEALIRE にあっては蓋となり、地上の空間は広大な独房と化してしまうの

が確認される。最初の二連で「いかなる場所へ行こうとも、海であれ山であれ、炎の風土にあらうと、太陽の下にあらうと、イエズスの僕、あるいはシテール島の殿上人であらうと、陰鬱な乞食、はたまた真紅に輝く大富豪でも、都会人、田舎者、放浪者でも、蟄居ちつきよの人でも、その小さな脳髓しもべが活発だろうと緩慢だろうと、いたるところで人間はこの不可思議に恐怖をおぼえ、眼を震えさせずに上方を眺めることはない」と説明された後、空は救いをもたらさないものとして次のように提示される。

En haut, le Ciel! ce mur de caveau qui l'étouffe,
Plafond illuminé pour un opéra bouffe
11 OÙ chaque histrion foule un sol ensanglanté;

Terreur du libertin, espoir du fol ermite;
Le Ciel! couvercle noir de la grande marmite
14 OÙ bout l'imperceptible et vaste Humanité.¹³

「上方には、〈天〉が！人間の息をつまらせる穴倉の壁、道化役者めいめいが血まみれの舞台を踏む喜歌劇オペラ・ブッフのために証明された天井。不信心者の恐怖のまと、気違い隠者の希望のよすが。〈天〉！広大にして目にもとまらぬ〈人類〉がそこに煮えたぎる、大きな鍋の黒い蓋」(v.9-14)。「空は大きな寝室のようにゆっくりと閉ざされる」¹⁴ (*Le Crépuscule de soir*) のであり、ここには詩人の現実に対する絶望的な閉塞感の認識がある。

現実を蓋された、閉ざされた空間とする形象は、その表題も *Spleen* と題された « Les Fleurs du mal » (第二版) の 78 番目の詩に全面的に展開されている。

Quand le ciel bas et lourd pèse comme un couvercle
Sur l'esprit gémissant en proie aux longs ennuis,
Et que de l'horizon embrassant tout le cercle
4 Il nous verse un jour noir plus triste que les nuits;

Quand la terre est changée en cachot humide,
Où L'Espérance, comme une chauve-souris,
S'en va battant les murs de son aile timide
8 Et se cognant la tête à des plafonds pourris;

Quand la pluie étalant ses immenses traînées
D'un vaste prison imite les barreaux,
Et qu'un peuple muet d'infâmes araignées
12 Vient tendre ses filets au fond de nos cerveaux,¹⁵

「低く重く垂れた空が、蓋のようにのしかかり、長い倦怠^{アンニュイ}の餌食^{うめ}となって呻く精神^{こころ}を押さえつけ、地平線の円周をすべて覆い尽くして、夜よりも鬱陶しい黒い日の光を私たちに注ぐ時」(v.1-4)。倦怠^{アンニュイ}は「人生に興味がもてなくなって何もせずに退屈している、永続的状态を指す」¹⁶(阿部良雄)が、基本的には spleen と同義語である。「大地は湿っぽい土牢と化してしまい、そのなかを〈期待〉^{こうもり}が蝙蝠のように、おずおずとした翼で壁をはたきながら飛び、腐った天井に頭をぶつけてばかりいる時」(v.5-8)。「期待」が鳩ではなく蝙蝠のように飛ぶとは、「期待が絶望によって表現され」¹⁷(PICHOSIS) するという矛盾語法を示している。「雨は果てもなく尾を曳き降り注いで。広大な牢獄の鉄格子の真似をし、汚らわしい蜘蛛たちの物言わぬ群れが、私たちの脳髓の奥に網を張る時」(v.9-12)。「頭のなかに蜘蛛がいる (avoir des araignées dans la tête)

とは、頭がおかしいという意味であり、第2連の chauve-souris (蝙蝠) と重なって、狂気を予感させる」¹⁸ (『悪の花評釈』)。ここには蓋のようにのしかかる低く重く垂れた空、湿っぽい土牢と化した大地、雨の広大な牢獄の鉄格子そして蜘蛛の巣を張る詩人の脳髄 (精神) が比喩的に等価であることが示されている。その時、

Des cloches tout à coup sautent avec furie
Et lancent vers le ciel un affreux hurlement,
Ainsi que des esprits errants et sans patrie
16 Qui se mettent à geindre opiniâtement.

— Et de longs corbillards, sans tambours ni musique,
Défilent lentement dans mon âme; l'Espoir,
Vaincu, pleure, et l'Angoisse atroce, despotique,
20 Sur mon crâne incliné plante son drapeau noir.¹⁹

「遠近おちこちの鐘が、突然、猛り狂って跳ね始め、空のほうへ恐ろしい唸り声を放てば、さながら故国も持たず彷徨さまよう亡霊たちが、執念深く嘆きの声を発し出すかのよう。——すると、長い霊柩車の列が、太鼓も音楽もなしに、ゆっくりと私の魂の中を通してゆく。〈希望〉は、打ち負かされて、涙を流し、残忍で暴虐な〈苦悶〉は私のうなだれた頭蓋の上に、その黒旗を立てる」(v.13-20)。この鐘の音は勿論葬送のそれであり、「黒旗」は喪のしるし、弔旗であろう。ここには詩人の現実の spleen に対する完全な敗北、精神の死が描き出されている。

II

何故 BAUDELAIRE の現実認識がこのような spleen に満ちた閉塞空間としてあらわれるかといえば、それは彼に憑きまとう深淵の感覚故にである。BAUDELAIRE は *Fusées* 16 に次のような有名な言葉を記している。

精神的にも肉体的にも、私にはいつも深淵の感覚があった、睡眠の深淵のみならず、行動の、夢の、追憶の、欲望の、哀惜の、後悔の、美の、数の、等などの深淵の感覚が。

私は快感と恐怖をおぼえながら自分のヒステリーを^{つちか}培ってきた。今では絶えず眩暈^{めまい}がするし、今日、1862年1月23日、私は奇妙な警告を受けた、痴保^ゝの翼^ゝの風が私の上を吹き過ぎるのを感じた。²⁰

この深淵の感覚は、「*Les Fleurs du mal*」第三版に加えられた、その表題も *Le Gouffre* という詩篇で次のように描かれている。

Pascal avait son gouffre, avec lui se mouvant.
— Hélas! tout est abîme, — action, désir, rêve,
Parole! et sur mon poil qui tout droit se relève
4 Mainte fois de la Peur je sens passer le vent.

En haut, en bas, partout, la profondeur, la grève,
Le silence, l'espace, affreux et captivant...
Sur le fond de mes nuits Dieu de son doigt savant
8 Dessine un cauchemar multiforme et sans trêve.

J'ai peur de sommeil comme on a peur d'un grand trou,
 Tout plein de vague horreur, menant on ne sait où;
 11 Je ne vois qu'infini par toutes les fenêtres,

Et mon esprit, toujours de vertige hanté,
 Jalouse du néant l'insensibilité.
 14 — Ah! ne jamais sortir des Nombres et des Êtres!²¹

「パスカルは、随^ついて動く彼の深淵をもっていた。—— ああ！すべては深淵だ、—— 行動も、欲望も、夢も、言葉も！そして真直ぐに逆立つ私の身の毛の上に、あまた^{たび}度私は〈恐怖〉の風の吹き過ぎるのを感じる」(v.1-4)。v.1に関しては、幾つもの注釈において、abbé BOILEAUがある女性に送った手紙の中に、「パスカル師はいつも自分の左手に深淵が見えると信じ、安心するためにそこに椅子を置かせるのでした。じかに聞いた話です」²²とあるのを SAINTE-BEUVEがその「Port-Royal」に引用したことが述べられている。「上にも、下にも、いたるところ、深みが、砂浜が、沈黙が、心奪う恐ろしい空間が…私の夜な夜なの地の上に、神はその巧みな指先で、途切れることのない様々な形の悪夢を描く」(v.5-8)。「私は眠りを怖れる、漠たるおぞましさに満ちてどこへ導くとも知れぬ大穴を人の怖れるように。私はあらゆる窓越しに無限ばかりを見る、そして私の精神は、絶えず眩暈^{めまい}につきまわられて、虚無の不感無覚を羨む。—— ああ！もろもろの〈数〉と〈存在〉から決して脱^ぬけ出さぬこと！」(v.9-14)。ここでは本来 BAUDELAIREの最も希求するものであったはずの「無限」も、底なしの暗黒の深淵と化しているのが読み取れる。最後の v.14は難解な詩句として様々な解釈を生んできたが、詩全体の流れから、PICHOSの主張する「ああ！決して〈数〉や〈存在〉から脱^ぬけ出さずにすんだならよかったのに！」²³と理解するのが妥当であろう。すなわち BAUDELAIREはここで無限

の深淵を怖れ、人間の有限性をむしろよしとしているのである。

La Muse malade は詩人をその深淵へと墮落させる要因の様相を語っている。詩人の生きる病める時代の美神^{ミューズ}は、今朝、落ち窪んだ眼には夜の幻がうごめいて、その顔色には、かわるがわる、冷たく口も利かぬ狂気と戦慄が映し出されている。その理由を第二連がこう問いかける。

Le succube verdâtre et le rose lutin
T'ont-ils versé la peur et l'amour de leurs urnes?
Le cauchemar, d'un poing despotique et mutin,
8 T'a-t-il noyée au fond d'un fabuleux Minturnes?²⁴

「緑がかった淫らな魔女や薔薇色の小妖精が、彼らの壺から恐怖と情欲をきみに注いだのか？悪夢が専横な粗暴な拳をふるって、伝説に聞くミントウルナエの沼底へきみを突き沈めたのか？」(v.5-8)。ミントウルナエの沼底とは、「ローマの将軍ガイウス・マリウスが追手を逃れるためにローマ市南方ミントウルナエの沼に口までつかったという故事」²⁵ による。美神^{ミューズ}の癒し難い転落は、人間存在を外的世界（＝深淵）の暗い力に従属させる運命を表している。*Le Flacon* という詩の次の一節は、この深淵への転落が BAUDELAIRE の魂の内部でも生じていることを明らかにしている。

Voilà le souvenir enivrant qui voltige
Dans l'air troublé; les yeux ferment; le Vertige
Saisit l'âme vaincue et la pousse à deux mains
16 Vers un gouffre obscurci de miasmes humains;²⁶

「今こそ、心酔わせる思い出は、濁らされた空気の中を舞いまわる。眼は閉ざ

される。〈眩暈^{めまい}は〉打ち負かされた魂を捕まえて、両の手で押しやる、人間の瘡癩^{しょうらい}の気に曇らされた深淵の方へと」(v.13-16)。思い出、眩暈、瘡癩の気、深淵が一気に詩人に襲いかかってくるようである。

その spleen に支配された深淵の情景は、その表題も *De profundis clamavis* (深キ淵ヨリ我呼ビヌ) ではさらに具体的に次のように描かれている。

J'implore ta pitié, Toi, l'unique que j'aime,
 Du fond du gouffre obscur où mon cœur est tombé.
 C'est un univers morne à l'horizon plombé,
 4 OÙ negent dans la nuit l'horreur et le brasphème;

 Un soleil sans chaleur plane au-dessus six mois,
 Et les six autres mois la nuit couvre la terre;
 C'est un pays plus nu que la terre polaire;
 8 — Ni bêtes, ni ruisseaux, ni verdure, ni bois!²⁷

「〈汝〉、わが愛する唯一^{ひと}の女、わが心の落ち込んだ光のなき深淵の底から、私は汝の憐憫^{あわれみ}を乞う。それは鉛色の地平に限られた陰鬱な世界、恐怖と冒瀆は夜の闇の中を漂う」(v.1-4)。この「〈汝〉、わが愛する唯一^{ひと}の女」とは Jeanne DUVAL のことであり、CRÉPET-BLIN は「宗教的要素を世俗の要素に転移することが、BAUDELAIRE の詩における〈女〉への偶像崇拜の最も際立った特徴をなす」²⁸ と指摘している。「熱のない太陽が六月の間その上に懸^かかり、残る六月は夜が大地を蔽い尽くす。それは極地よりもさらに裸の国。—— 獣もいなければ、小川も、草木も、森もない！」(v.5-8)。そこは生命^{しるし}の徴を感じられない暗鬱な世界である。

III

このように風景が木も花も咲かない砂漠に比較される空間においては、非常にしばしば「死」が支配的役割を演じる。*Causerie* には、詩人の内面的空間（=心）も破壊と暴力によって極端な荒廃に陥っていることが示されている。

— Ta main se glisse en vain sur mon sein qui se pâme;

Ce qu'elle cherche, amie, est lieu saccagé

Par la griffe et la dent féroce de la femme.

8 Ne cherchez plus mon cœur; les bêtes l'ont mangé.

Mon cœur est un palais flétri par la cohue;

10 On s'y soûle, on s'y tue, on s'y prend aux cheveux!²⁹

「— 君の手は空しく滑る、茫然としている私の胸の上を。恋人よ、その手の探るものは、女の爪と凶暴な歯によって荒らされたところ。もはや私の心臓を探したもうな。それは獣たちが食べてしまった。私の心は暴徒の群れに潰された宮殿だ。者どもはそこに酔いしれ、殺し合い、髪をつかみ合う」(v.5-10)。v.10 について CHÉRIX は「摩擦音 s の繰り返しは騒動の印象を強める」³⁰ と指摘する。詩人は最後には恋人の「炎の眼で、獣たちの食い残したこれらの残骸を焼き尽くせ！」と懇願するが、それは詩人の完全な無化（=死）への絶望的な希求を表している。

それは詩人の生きる大都市パリの住民すべてが逃れられぬ「死の運命」でもある。*Spleen*75 はその情景を次のように描く。

Pluviôse, irrité contre la ville entière,

De son urne à grands flots verse un froid ténébreux

Aux pâles habitants du voisin cimetière

4 Et la mortalité sur les faubourds brumeux.³¹

「^{ブリュヴィオーズ}雨月」は、都市全体に向かって腹を立て、その水甕からなみなみと、隣の墓地の色青ざめた住民に暗黒な冷たさを、霧深い^{フォーブール}場末町には死の運命を注ぎかける」(v.1-4)。「雨月」は共和暦の第五月のことで、太陽暦の一月二十日(あるいは二十一日)から二月十八日(あるいは十九日)に当たる。真冬の月であり、従って老いと死の季節であることを暗示する。BAUDELAIRE の生きた十九世紀半ばのパリの場末町は日当たりも悪く非衛生的で、労働者や貧民が栄養失調のような状態で貧窮の中で暮らしていた。そこに冬の冷たい雨が牢獄の鉄格子のように人々を閉じ込め、「死^{モルタリテ}すべき運命」へと押しやる。こうして詩人が転落してゆく底なしの深淵の果てに待ち受けるものが「死」であることが確認される。

その時、空間は BAUDELAIRE にあってはそのすべての魔術的喚起力を失う。それは世界からその最も美しい色彩を奪う光の不在によって特徴づけられる。詩篇 *L'Irréparable* に次のように読むことができる。「取り返しのつかぬもの」とは、神に見放され、罪の意識に苦しむ者の悩みのことであり、「悪に荒廃したロマン派の主人公たちにつきまとう」、「後悔のように、厳密な過ちにはなく、時間の不可逆性とひとつになった、漠然とした、潜在的な罪の意識に結びついた」³² (PICHOS) ものである。

Peut-on illuminer un ciel bourbeux et noir?

Peut-on déchirer des ténèbres

Plus denses que le poix, sans matin et sans soir,

Sans astres, sans éclairs funèbres?

25 Peut-on illuminer un ciel bourboux et noir?³³

「泥まみれの黒い空を輝かすことはできようか？^{ゾール}瀝青より濃く、朝もなければ夕べもなく、星もなく、不吉な稲妻さえない暗闇を引き裂くことができようか？泥まみれの黒い空を輝かすことができようか？」(v.21-25)。そのような空間にはなんの希望も存在しない。

L'Espérance qui brille aux carreaux de l'Auberge

Est soufflée, est morte à jamais!

Sans lune et sans rayons, trouver où l'on héberge

Les martyrs d'un chemin mauvais!

30 Le Diable a tout éteint aux carreaux de l'Auberge!³⁴

「〈旅籠屋〉の格子窓に輝く〈希望〉は吹き消され、永遠に死んでしまった！月もなく光線もないのに、どこに見つけたものか、悪しき道の殉教者を泊めてくれる所を！〈悪魔〉が〈旅籠屋〉の格子窓に、すべてを吹き消してしまった！」(v.26-30)。この「旅籠屋」とは *La Mort des pauvres* に描かれた聖書の「善きサマリア人」の喩話に出る、「暴風雨を、雪を、樹氷を横切って、かなたに」「われわれの黒い地平線に震える光」を放つ「書物の上に記された名高い旅籠屋」のことであろうが、今やその光の「希望」は吹き消され、さらに「死んだ」と強調され、最後にだめ押しのように「永遠に」と付け加えられている。「悪しき道の殉教者」とは「悪の道に踏み込んで懲罰を受ける罪びと（「地獄墮ちの人間」）でもあるだろう」³⁵（阿部良雄）し、詩的創造に自己の生涯をかけ、その難路に立ち往生する詩人としての BAUDELAIRE のことに他ならないであろう。

その時、空間は BAUDELAIRE にとって彼の現実の有限性の苦悩の認識でし

かない。

Dans les caveaux d'insondable tristesse
 Où le Destin m'a déjà relégué;
 Où jamais n'entre un rayon rose et gai;
 4 Où, seul avec la Nuit, maussade hôtesse,

Je suis comme un peintre qu'un Dieu moqueur
 Condamne à peindre, hélas! sur les ténèbles;³⁶

(*Un Fantome I Les Ténèbles*)

「測り知れぬ深い悲しみの穴倉の中、〈運命〉が私をすでに押し込めた場所。かつて薔薇色の快活な光線の射しこむためしなく、^{ぶっちょうづら}仏頂面の女主人とともに独り、私はさながら、どこかの^{からかい}揶揄好きな〈神〉によって、ああなんと！暗闇の上に描くことを強いられた画家だ」(v.1-6)。「un Dieu moqueur とは v.2 の le Destin (「運命」の女神) の支配下にあるもうひとりの神と考えるべきであろう。不定冠詞 un を付けることによってキリスト教の神ではないことが明示される」³⁷ (『悪の花評釈』)。BAUDELAIRE の現実を超越しようとする詩が、詩の内部に自由の永続的な感覚を創りだすために新たな地平線を切り開くことを許す詩的想像力の恒常的な動性に基づくとすれば、spleen は、反対に、可能性の場を制限し、BAUDELAIRE に自分自身の裸形の生との恐ろしい、不条理な直面を強いる。*L'Irrémediable* という詩篇はそういう詩人の状況を「地獄堕ちの男」として全面的に描いた作品である。

Une Idée, une Forme, un Être
 Parti de l'azur et tombé

Dans un Styx bourbeux et plombé

4 OÙ nul œil du Ciel ne pénètre;³⁸

「蒼空から出発しながら、泥を含んで鉛色の^{ステュクス}三途の河、〈天〉のいかなる眼もとどかぬところへ落ち込んでしまった、一つの〈観念〉、一つの〈形相〉、一つの〈存在〉」(v.1-4)。〈観念〉はプラトンの意味での真の实在としての「アイデア」を、〈形相〉はスコラ哲学的意味での物質の様態を決定するものとしての存在論的原理を、〈存在〉は仮象世界を超越する天上界（「蒼空」）に住むグノーシスの「存在者」を示すとみなせるが、それらは皆否定され、「泥を含んで鉛色の三途の河」に失墜してしまっているのである。詩人は、「畸形のものへの愛に駆り立てられて、軽はずみにも旅に出」て、「度外れに大きな悪夢の底で、泳ぐ者のようにもがき」、「陰惨な不安」と闘いながら「巨人のような大渦巻を相手に、暗闇の中でぐるぐると旋回する」「一人の〈天使〉」であり、「爬虫類でいっばいの場所から遁れようと、光を求め、鍵を求めて、いたずらに手探りを繰り返す、魔法にかかった不幸な男」である。

Un damné descendant sans lampe,

Au bord d'un gouffre dont l'odeur

Trahit l'humide profondeur,

20 D'éternels escaliers sans rampe,

Où veillent des monstres visqueux

Dont les larges yeux de phosphore

Font une nuit plus noire encore

24 Et ne rendent visibles qu'eux;

Un navire pris dans le pôle,
 Comme en un piège de cristal,
 Cherchant par quel détroit fatal
 28 Il est tombé dans cette geôle;³⁹

「湿気に満ちてどこまでも深いことが匂にそれと知られる深い穴の縁を、手摺もなく永遠に続く階段伝い、ランプも持たず降りてゆく地獄墮ちの男、そこに見張る、ぬるぬるした怪物どもの、広い眼が^{まなこ}燐の光を放てば、夜の闇はさらに暗さを増すばかり、彼ら自らの姿ばかり浮かびあがる。水晶の罫にかかったかのように、北極の中に閉じ込められて、どんな宿命の海峡からこの牢獄に落ち込んだのかと、探しあぐねる一艘の船」(v.17-28)。ここには天上界(精神世界)から悪魔の支配する下界(物質世界)に転落してしまった人間の苦悩が描かれている。

— Emblèmes nets, tableau parfait
 D'une fortune irrémédiable,
 Qui donne à penser que le Diable
 32 Fait toujours bien tout ce qu'il fait!⁴⁰

「—— 救いようのない運命の歴然たる標章、完全な絵解き、これを見れば〈悪魔〉は、することすべて見事に仕上げると知られる」(v.29-32)。

おわりに

さらに BAUDELAIRE の spleen の認識は *Le Squelette laboureur* では最も絶望的な様相をしめす。そこでは、墓穴も、虚無も、死も詩人に安寧の眠りを約

束しない。

Voulez-vous (d'un destin trop dur
Épouvantable et clair emblème!)
Montrer que dans la fosse même
24 Le sommeil promis n'est pas sûr;

Qu'envers nous le Néant est traître;
Que tout, même la Mort, nous ment,
Et que sempiternellement,
28 Hélas! il nous faudra peut-être

Dans quelque pays inconnu
Écorcher la terre revêche
Et pousser une lourde bêche
32 Sous notre pied sanglant et nu?⁴¹

「きみたちは示したいのか（あまりにも酷い^{むご}運命の、おそろしくも明瞭な^{しるし}標徴
ではある！）墓穴の中でさえ、約束の眠りは当てにならぬことを？われらに対
し〈虚無〉は裏切り者であること、一切は〈死〉さえも、私たちに嘘をつくこ
と、そして、ついぞ果てる時なく、悲しいかな！私たちは、ひょっとすると、
どこか未知の国へ行って、ごつごつした荒地の皮を剥ぎ、血まみれの裸足での
下、重い鋤を押し続けねばならぬことを？」(v.21-32)。「Les Fleurs du mal」
(第二版)の悼尾を飾る長詩 *Voyage* の最終二連では、「死」も「深淵」も次の
ように表現されていた。

Ô mort, vieux capitaine, il est temps! levons l'ancre!
 Ce pays nous ennuie, ô Mort! Appareillons!
 Si le ciel et la mer sont noirs comme de l'encre,
 140 Nos cœurs que tu connais sont remplis de rayons!

Verse-nous ton poison pour qu'il nous réconforte!
 Nous voulons, tant ce feu brûle le cerveau,
 Plonger au fond du gouffre, Enfer ou Ciel, qu'importe?
 144 Au fond de l'Inconnu pour trouver du *nouveau*!⁴²

「おお〈死〉よ、老船長よ、時は来た！錨を揚げよう！この国は私たちを退屈させる、おお〈死〉よ！船出しよう！たとえ空や海は墨のように黒くとも、きみの知る私たちの心は光線に満ちみちる！私たちにきみの毒を注げ、毒が私たちを力づけんがために！私たちの望むところは、かくもこの火が激しく脳髓を焼くが故、〈地獄〉でも〈天〉でもかまわぬ、深淵の底へ跳びこむこと、〈未知なるもの〉の奥底深く、新しきものを探ること！」(v.137-144)。ここには、現実と夢と世界での様々な彷徨の末の最後の一縷の望みとしての「死の深淵のなかへの未知なるもの」の探索が、BAUDELAIREの辿り着いた詩人としての最後の使命への信として表明されているのに対して、*Le Squelette laboureur* においては、死の救済も、死の虚無も、死の「真理」も存在しないという思想が表明されている。これほど苛烈で不条理な死生観を他に知らない。

註

使用テキスト：BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude PICHOS, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols. 以下 O.C., t. I, t. II

と略記。

- 1) *LE ROBERT*, DICTIONNAIRE alphabétique et analogique de la LANGUE FRANÇAISE, p. Paul ROBERT, 1978, Tome sixième, p.346
- 2) *O.C.*, t. I , p.833
- 3) BAUDELAIRE, *Correspondance*, t. I , p.437-438
- 4) *Ibid.*, p.334
- 5) *Ibid.*, p.356
- 6) *Ibid.*, p.357
- 7) Emmanuel ADATTE, *Les Fleurs du mal et Le Spleen de Paris, essai sur le dépassement de réel*, José Corti, p.36
- 8) *O.C.*, t. I , p.143
- 9) Cf . BAUDELAIRE の次のような指摘は、詩的・美学的にも大変興味深いものである。「私は歓喜と美とは両立し得ないと主張するわけではないが、歓喜は美の最も通俗的な装飾の一つに過ぎないのに反して、憂鬱はいわば美のすぐれた伴侶であると言いたい。ひいては私は（私の脳髄は魔法をかけられた鏡なのだろうか）不幸を伴わない美のタイプはほとんど考えられないほどである」(*FuséesX*)。 *O.C.*, t. I , p.657-658
- 10) *O.C.*, t. I , p.169
- 11) *Ibid.*, p.281
- 12) *Ibid.*, p.16
- 13) *Ibid.*, p.141
- 14) *Ibid.*, p.94
- 15) *Ibid.*, p.74-75
- 16) 阿部良雄訳註「ボードレール全集 I」筑摩書房, p.546

- 17) *O.C.*, t. I, p.979
- 18) 多田道太郎編「悪の花評釈」平凡社, p.799
- 19) *O.C.*, t. I, p.75
- 20) *Ibid.*, p.668
- 21) *Ibid.*, p.142-143
- 22) *Ibid.*, p.1115
- 23) *Ibid.*, p.1116
- 24) *Ibid.*, p.14
- 25) 阿部良雄訳註, *op.cit.*, p.481
- 26) *O.C.*, t. I, p.48
- 27) *Ibid.*, p.32
- 28) BAUDELAIRE, *Les Fleurs du mal*, p.Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, p.351
- 29) *O.C.*, t., p.56
- 30) Robert Benoix CHÉRIX, *Commentaires des "Fleurs du mal"*, Droz, p.211
- 31) *O.C.*, t. I, p.72
- 32) *Ibid.*, p.931
- 33) *Ibid.*, p.55
- 34) *Ibid*
- 35) 阿部良雄訳註, *op.cit.* p.107
- 36) *O.C.*, t. I, p.38
- 37) 多田道太郎編, *op.cit.*, p.372
- 38) *O.C.*, t. I, p.79
- 39) *Ibid.*, p.80
- 40) *Ibid*
- 41) *Ibid.*, p.94

42) *Ibid.*, p.134

参考文献

BAUDELAIRE, *Œuvres complètes*, p.Claude Pichois, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1975, 1976, 2vols.

BAUDELAIRE, *Les Fleurs du mal*, Jacques Crépet et Georges Blin, José Corti, 1942

BAUDELAIRE, *Les Fleurs du mal*, p.Antoine Adam, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1961.

BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Robert Kopp, José Corti, 1969.

BAUDELAIRE, *Petits Poèmes en prose*, p.Henri Lemaître, Garniers Frères, « Classiques Garnier », 1962.

Emmanuel ADATTE, *Les Fleurs du Mal et Le Spleen de Paris, essai sur le dépassement du réel*, José Corti, 1986.

Robert-Benoît CHÉRIX, *Commentaire des "Fleurs du mal"*, Droz, 1962.

Marc EIGELDINGER, *Le Soleil de la poésie*, la Baconnière, 1991.

Pierre EMMANUEL, *Baudelaire, la femme et Dieu*, Seuil, 1982.

René GALAND, *Baudelaire, poétiques et poésie*, Nizet, 1969.

J.-D HUBERT, *L'Esthétique des "Fleurs du mal"*, P. Callier, 1953.

Jean PRÉVOST, *Baudelaire, essai sur la création et l'inspiration poétiques*, Mercure de France, 1964.

Jean Pierre RICHARD, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955.

Jean Paul SARTRE, *Baudelaire*, Gallimard, 1947.

阿部良雄訳註『ボードレール全集 I - VI』, 筑摩書房, 1983-1993.

多田道太郎編『悪の花註釈』, 平凡社, 1988